コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは、「青年の社会貢献」を共通テーマとし、世界的視野に立った共通の課題に関するディスカッションを実施した。参加青年の希望に基づき、次の七つのコースに振り分けた。テーマに関連する分野で活躍するファシリテーターがそれぞれのコースを担当し、参加青年のディスカッションをリードした。

- 平和な世界をつくるための教育コース
- お互いを高め合う実践型エンパワメントコース
- グローバル・シティズンシップコース
  ～多文化共生時代の地球市民になるために～
- グローバルヘルスコース
  ～予防可能な疾病と世界の健康・保健～
- 国際協力コース
- 情報とメディアコース
- ソフトパワーと青年外交コース

第２章

事業の実施

外国参加青年の来日

外国参加青年は平成 31 年 1 月 15 日に来日した。翌 16 日の昼に開催した歓迎レセプションでは左藤章内閣府副大臣が歓迎の挨拶を行った。1 月 17 日から 20 日にわたり、外国参加青年は 2 か国ごとに該当する府県を訪問し、三泊四日の地方プログラムを実施した。

地方プログラム

宮城県（ソロモンとトルコ参加青年）

月　日	時　間	活動内容
1月17日 （木）	12:12 － 14:25 16:00 － 16:30	東京駅より仙台駅へ（やまびこ 209 号） 後藤康宏宮城県環境生活部部長を表敬訪問
1月18日 （金）	9:30 － 10:20 10:50 － 11:30 11:50 － 15:30 18:00 － 20:00	震災遺構 仙台市立荒浜小学校を視察 かまぼこの鐘崎を視察 宮城県青年会館にて地元青年と交流 歓迎会及びホームステイマッチング
1月19日 （土）	終日	ホームステイ
1月20日 （日）	11:40 12:44 － 14:48	ホームステイ家庭より集合 仙台駅より東京駅へ（やまびこ 140 号）

大阪府（オーストラリアとタンザニア参加青年）

月　日	時　間	活動内容
1月17日 （木）	11:00 － 13:33 15:00 － 15:30 18:00 － 20:00	東京駅より新大阪駅へ（のぞみ 225 号） オリエンテーション 夕食交流会
1月18日 （金）	10:00 － 10:20 10:20 － 11:30 12:30 － 13:15 15:00 － 18:00 19:00 － 20:45	竹内広行大阪府副知事を表敬訪問 大阪府庁本館庁舎内見学 大阪城見学 地元青年と大阪市内散策 歓迎会及びホームステイマッチング
1月19日 （土）	終日	ホームステイ
1月20日 （日）	12:00 12:50 － 15:23	ホームステイ家庭より集合 新大阪駅より東京駅へ（のぞみ 226 号）

三重県（チリとスウェーデン参加青年）

月　日	時　間	活動内容
1月17日 （木）	9:00 － 10:41 11:00 － 11:44 12:15 － 13:20 13:40 － 15:50 17:00 － 17:30	東京駅より名古屋駅へ（のぞみ 213 号） 名古屋駅より津駅へ（近鉄 61 号） オリエンテーション及び昼食 四天王寺にて箸づくり体験 稲垣清文三重県副知事を表敬訪問
1月18日 （金）	9:30 － 15:45 18:00 － 20:30	三重県立相可高等学校を訪問し地元学生と交流（調理体験、授業体験、文化交流） 歓迎会及びホームステイマッチング
1月19日 （土）	終日	ホームステイ
1月20日 （日）	10:20 10:25 － 10:40 11:24 － 12:09 12:33 － 14:13	ホームステイ家庭より集合 さよならセレモニー 津駅より名古屋駅へ（近鉄 10 号） 名古屋駅より東京駅へ（のぞみ 16 号）

徳島県（エクアドルとギリシャ参加青年）

月　日	時　間	活動内容
1月17日 （木）	11:45 － 13:05 15:00 － 15:30 16:00 － 16:30 18:30 － 20:30	羽田空港より徳島空港へ（JAL475 便） オリエンテーション 坂東安彦徳島県県民生活部部長を表敬訪問 夕食交流会
1月18日 （金）	9:50 － 10:50 13:30 － 16:30 18:30 － 20:30	大鳴門橋架橋記念館エディを視察 技の館を訪問し藍染体験 歓迎会及びホームステイマッチング
1月19日 （土）	終日	ホームステイ
1月20日 （日）	11:30 12:00 － 12:30 13:50 － 15:00	ホームステイ家庭より集合 さよならセレモニー 徳島空港より羽田空港へ（JAL458 便）

宮崎県（UAE とバヌアツ参加青年）

月　日	時　間	活動内容
1月17日 （木）	11:45 － 13:40 14:30 － 15:30 17:15 － 17:30 18:30 － 20:30	羽田空港より宮崎空港へ（JAL691 便） 青島神社訪問 河野俊嗣宮崎県知事を表敬訪問 夕食交流会
1月18日 （金）	9:30 － 10:20 10:30 － 11:30 13:20 － 14:50 18:00 － 20:00	田野大根やぐらを視察し収穫体験 道本食品の漬物工場を視察 宮崎市立田野小学校を訪問し児童と交流 歓迎会及びホームステイマッチング
1月19日 （土）	終日	ホームステイ
1月20日 （日）	10:40 11:00 － 11:10 12:35 － 14:00	ホームステイ家庭より集合 さよならセレモニー 宮崎空港より羽田空港へ（JAL692 便）

出航前研修

1月19日から一泊二日で国立オリンピック記念青少年総合センターにて実施した日本参加青年の出航前研修では、ナショナル・リーダー及びサブ・ナショナル・リーダー主導で乗船に向けた心構えと意識の統一をし、ナショナル・プレゼンテーションの練習、委員会別やレター・グループ別でのミーティングを行い、いよいよ始まる全体での研修に向けて準備を進めた。IDI調査実施に関連した説明と講義もこの研修中に行われた。

1月20日の夕方、地方プログラムから帰京した外国参加青年が合流し、ナショナル・リーダー主導のアイスブレーキングを経て、翌日から開始する全参加青年で行う陸上研修に備えた。

陸上研修

1月21日から26日まで国立オリンピック記念青少年総合センターで実施した陸上研修には、宮腰光寛内閣府特命担当大臣が駆けつけ、参加青年に対して激励の言葉を述べた。1月22日にはレター･グループ別に分かれて、日本参加青年が外国参加青年を案内する都内視察を実施し、24日には、研修の中心的プログラムであるコース・ディスカッションの七つのテーマ別に、コースの内容に即した課題別視察を実施した。（詳しい内容については下記を参照）

1月25日午前、各国のナショナル・リーダーとアシスタント・ナショナル・リーダー、日本のサブ・ナショナル・リーダーは皇太子殿下への御接見を賜り、また、同日の夕刻に安倍晋三内閣総理大臣表敬を行った。

1月27日に横浜へ移動し、にっぽん丸に乗船。28日には、船上でオープンシップ（船内見学会）と出航式を行い、16:00に横浜港大さん橋国際客船ターミナルを出航した。

1 都内視察

1月22日に行われた都内視察では、レター・グループ別に分かれて、日本参加青年が外国参加青年を案内した。都庁を訪問したり、原宿や明治神宮などを訪問したりすることで、外国参加青年が東京について知る機会となった。また、レター・グループで1日行動を共にすることでお互いの理解を深めた。

2 課題別視察

コース・ディスカッションの一環として陸上研修中の1月24日に行われた。コースの内容に即した視察先へ赴き、各ディスカッションのトピックに関連する日本の事例として視察し、残り4回のコース・ディスカッションに備えた。

平和な世界をつくるための教育コース
視察先：明治学院大学 国際平和研究所

明治学院大学の国際平和研究所を訪問し日本の歴史、世界の歴史に基づいた平和教育について、高原孝生教授よりご講義いただいた。

第二次世界大戦が広島及び長崎にもたらした悲劇的な人口減少と健康被害について講義とドキュメンタリービデオを観た後、参加青年は争いを避け、二度と過ちを繰り返さないために教育が担う役割についてディスカッションを行った。また、教育がどのように対話による相互理解を促進し、より合理的で寛容な世界を構築するために重要か話し合うことができた。

お互いを高め合う実践型エンパワメントコース
視察先：認定特定非営利活動法人　カタリバ

団体設立の経緯や理念、活動内容を伺い、なかでも高校生に焦点を当てた課題解決型学習プログラム「マイプロジェクト」について、エンパワメントと絡めて紹介して頂いた。

日本の高校生は諸外国に比べて、自己肯定力や自分たちが社会を変えられるという意識が低いという現状があり、カタリバでは自ら地域や身の回りの課題に気がつき、アクションをおこし、コミュニティリーダーとなることを支える活動を行っている。

参加青年同士、「自分の高校生活を振返って」「自国の教育分野における課題」などを話し合い、全体で共有することで、互いの国の実情を理解する場ともなった。

グローバル・シティズンシップコース
視察先：株式会社メルカリ

企業概要及び「メルカリでグローバライゼーション、ダイバーシティ、インクルージョンを促進させるものは何か」というテーマのもと、企業における多文化共生への取組を聞いた。スピーカーの一人から多文化共生における課題として四つの障壁（言語的障壁、文化的障壁、イデオロギーの対立、カルチャーショック）が紹介され、それぞれに対するメルカリの施策が説明された。その後、参加青年は小グループに分かれ、様々な国籍の社員とともに多文化共生に関する課題と解決策についての議論を行った。多文化共生こそが企業の強みになるというメルカリのメッセージに、参加青年は大いに刺激を受けた様子だった。

グローバルヘルスコース
視察先：国立国際医療研究センター

団体の概要及び21世紀の主要なグローバルヘルスの課題について説明を受けた。日本人だけでなく発展途上国の人たちへの研修も行っており、団体の主要な機能は「国際協力」であると繰り返し説明をされた。

小グループディスカッションでは、ある発展途上国における母親と幼児の死亡率の事例が紹介され、参加青年は様々な視点から健康を害する要因について話し合った。直前のコース・ディスカッションのセッションで学んだことを大いに発揮できる場となった。

国際協力コース
視察先：特定非営利活動法人 WELgee

世界の難民の状況と日本の難民受入れの状況が共有された上で、WELgeeの三本柱、「共に話す、共に住む、共に働く」について伺った。企業とのジョブマッチングやシェアハウスなど、日本に来た難民と共存していく社会をどのように作っていくかの説明を受けた。

また、様々な国籍の難民から自国について、自身の置かれた現状と今後について聞き、フリーディスカッションを行った。今までは文字でしか難民について知らなかった参加青年も直接話をする機会を得られて難民支援がより身近な問題として捉えられるようになった。

情報とメディアコース
視察先：日本放送協会（NHK）

実際にニュースの放送に使用されているスタジオの見学や、NHK World の様々な取組の紹介映像を鑑賞した後に、NHK 放送総局橋本明徳特別主幹、NHK 国際放送局国際企画部田中淳子部長、NHK 国際放送局国際企画部松田朋子副部長によるパネルディスカッションを行っていただいた。「どのように視聴者が好む番組作りを心がけていますか?」「日本の他の放送局と比べて NHK の強みは何ですか?」など参加青年から多くの質問に答えていく形で細かく丁寧に説明をしていただいた。その後、NHK スタジオパークを見学し、最新の NHK の技術に触れ、参加青年は楽しみながら日本のメディアについて学びを深めることができた。

ソフトパワーと青年外交コース
視察先：早稲田大学　国際教養学部

本コースでは早稲田大学を訪問し、国際教養学部の上杉勇司教授からの講義を受けた。講義では、外交におけるソフトパワーとは何かという議論から始まり、大学等の教育機関が、国際社会で活躍するリーダーを輩出することで、世界平和に貢献できる可能性を有していることが認識された。ディスカッションでは、多くの参加青年から教育こそ平和を志すリーダー層の育成に重要であるという声が聴かれ、初等教育や教育政策において示されるべきリーダー像の在り方など、多岐にわたる議論が交わされた。

3 リーダーシップ・セミナー

1 月 23 日の午後、参加青年全員を対象としたリーダーシップ・セミナーが開催された。このセミナーでは、一人の人物がチーム全員をリードする従来のリーダー像と、役職に限らず、だれもが自分らしくリーダーシップを発揮する新しいリーダー像の比較を基調とした講義が行われた。講義の軸となる“Everyone is a leader（一人一人がリーダーである）”という概念に立脚し、セミナーの後半では参加青年の活発なディスカッションが行われた。ディスカッションでは、事業期間中の共同生活や研修において、さらには事業終了後、自国や国際社会において、自身がリーダーシップを発揮したい分野について小グループで話し合った。このディスカッションを通して、参加青年は自身の特性や、これまでの集団生活、身近にいる尊敬できる人物などを振り返りながら、目指すべきリーダー像を明確にした。最後に、有志の参加青年約 10 名が、このセミナーからの学びを踏まえて、それぞれの目標を発表し、講師からのフィードバックと“Von Voyage（よい旅を）”という激励の言葉でセミナーを締めくくった。

船上研修

1 月 28 日から 3 月 1 日までにっぽん丸で実施した船上研修では、次に記述する多種多様な活動を通し参加青年同士は交流を図った。

2 月 27 日にドルフィンホールにおいて行われた修了式では、各国のナショナル・リーダー及びアシスタント・ナショナル・リーダーが代表して壇上で修了証を受け取った。参加青年を代表してタンザニアのナショナル・リーダーがスピーチを行った後、駒形健一管理官から挨拶があり、閉会となった。

コース・ディスカッション　※第 1、第 2 セッションは陸上研修で行った

コース・ディスカッションは「青年の社会貢献」を共通のテーマとし、七つのコースが実施された。各コースの分野について学ぶとともに、多国籍の参加青年が実体験に基づく発表や意見交換をすることで、参加青年同士、また、参加国への理解を深める場となった。さらに、ディスカッションを通して、課題解決のために自ら取り組める分野を見つけ出し、その実現に向けて具体的な活動を組み立てることをねらいとした。

1) 平和な世界をつくるための教育コース

副題：教育を通して平和な世界をつくる

ファシリテーター：カルロス・アルバイザ・メサ
参加青年：34 名（日本参加青年 18 名、外国参加青年 16 名）

1. コース概要

本コースでは、教育に関連した極めて重要ないくつかの中心的テーマを学ぶ。教育を実質的な変革をもたらすツールとして捉える視点から、また人々に気付きを与え、平和の基礎を築き、そして最終的には世界の平和をもたらす道として教育を捉える視点から扱う。同時に、各自の日々の生活における教育の力と役割を理解することにより、参加青年はより広い視点から現実を理解できるようになる。さらに、参加青年は教育に関連したいくつかの主要な手法やアクティビティ、視点などについても学び、これらのリソースを「グローカル」な視点を持ってさまざまなプロジェクトを通して実際に使うことができるようになる。

2. コースの目的

- 参加者重視の対話型セッションを提供する。コースで扱うメイントピックは、学習プロセスと障害、心の知能、多文化教育などだが、参加青年はこれらのトピックに関連した概念を吸収し、自分のものにするだけでなく、それらを地球社会という広い視点からどのように結びつけることができるのかを学ぶ。
- 我々は国境を超えた複雑な問題をいくつも抱えている。本コースでは地球市民としてこれらの問題を理解、熟考、解決するために必要となるさまざまな感情的、認知的、また社会的なスキルについて検討する。そのために、教育という視点や活発な意見交換、新しい実際的なリソースを用いる。
- 参加青年が、教育関連の分野横断型のプロジェクトを計画し、準備し、作り上げていけるようにする。これらのプロジェクトを通して、参加青年がそれぞれのコミュニティに変化をもたらし、いずれは広く社会に、そして世界に変化をもたらすことを目指す。

3. セッション概要

セッション 1：「教育が鍵」：現在私たちがどのように物事を学び、自分自身や他の人たちをどのように見ているかに関連する主要な概念	
目的とねらい	活動の内容
■ 生活の中で教育や学びのプロセスが果たしている役割についての共通の知識と理解を構築する。 ■ 神経多様性（Neurodiversity）及び包摂的教育という概念と、その重要性を学ぶ。 ■ 感情教育という概念、その重要性、自分自身や仲間の成長に向けた実際的活用法について学ぶ。	■ 参加型講義（Q&A、ディスカッション中心型授業） ■ ワークショップ（私はどのように学ぶのか?）：「形（Shapes）」アクティビティ。これを通して、参加青年は自分自身がどのように物事を学ぶのかについて理解を深め、他の人たちと共通する学びのプロセスに気付く。 ■ 討論やディベート、対話型のアクティビティを通してまずは自分自身の、次に人の多様性と独自性に気付く。
セッション 2：世界の教育システム：私たちはどこに向かっているのか。近年の各国及び世界の教育の傾向	
目的とねらい	活動の内容
■ 世界各国での教育に関わる個別の問題及び共通する問題を知る。 ■ 各国の教育の現状とその影響を分析する。 ■ 具体的な方法でこれらの問題を解決するためのアイデアを広め始める。	■「エナジー・アップ」アクティビティの開始 ■ 自分自身や仲間の成長に向けた心の知能育成アクティビティ ■ ワークショップ：多国籍メンバーからなる小グループで、それぞれの国の教育の現状について発表する。 ■ 各国の教育における長所と短所についてミニ・プレゼンテーション。 ■ まとめ：W3 グループ・アクティビティ（What：何?、So what：だから?、Now what：それで?）

セッション３：日常生活における教育：現状と課題。関連する SDGs ゴール	
目的とねらい	活動の内容
■ ここまでの内容とアイデアをまとめ、進捗を確認する。 ■ 社会における教育の役割と影響を振り返り、もう一度考えてみる。 ■ 教育の発展における「成功要素」を分析するためのチームを作る。 ■ サマリー・フォーラム・チームを編成する。	■ 参加型の概要講義 ■ 自分自身や仲間の成長に向けた心の知能育成アクティビティ ■ ピア･ラーニング（学び合い）･ディスカッション。まず二人組で、次に小グループで。これはメタ認知を最大化するために行う。
セッション４：多文化アプローチ：教育を通した地域や地球規模での問題解決	
目的とねらい	活動の内容
■ 教育の改善に向けて行われている模範的活動について世界の事例から学ぶ。 ■ 成功事例を見つけ、目的達成に導いた要因や行動を明らかにする。 ■ 専門分野の違うメンバーからなるチームを編成し、持続可能なプロジェクトを立ち上げる。	■ 参加青年による発表：世界で見られる教育分野の取組や革新の事例 ■ Q&A セッション ■ 自分自身や仲間の成長に向けた心の知能育成アクティビティ ■ ワークショップ:「トロイカ･コンサルティング」とマインド･マップ･アクティビティ
セッション５：教育の総合計画：カリキュラム作成 まとめとサマリー・フォーラムの準備	
目的とねらい	活動の内容
■ コースでの学びをまとめる。 ■ 教育カリキュラム設計の基礎的指針を作る(体系的手法)。 ■ サマリー・フォーラムでの最終発表に向けた参加青年による準備。	■ 参加青年中心の講義：「カリキュラム作成：成功のための体系的計画」 ■ 発見と行動のダイアログ（DAD：Discovery and Action Dialogue）：まとめの討論とメタ認知（我々は何を学び、それをどういかすのか。） ■ ワークショップ：九つの Why（なぜ）。社会の変革にとって教育プロジェクトとそれらへの投資が根本的に重要なのはなぜか。その理由を挙げる。 ■ 参加青年によるサマリー・フォーラムの準備

4. ファシリテーターのコメント

「平和な世界をつくるための教育コース」には二つの主なねらいがあった。一つは、社会にポジティブな変革をもたらすことのできるツールとしての教育の役割とその重要性に気付くことである。このねらいに向けて、参加青年は教育分野の基本理念を学ぼうと熱心に努力し、平和な世界をつくるために必要となる社会の大きな変革において教育がいかに根本的な役割を果たすのかを理解した。

もう一つの主なねらいは、感情的、認知的、また社会的なスキルを育成することである。人間味のあるアプローチでこれに取り組み、参加青年は自分自身の持つ強みと弱みをより深く理解し、それぞれの持っているリソースや新たに発見したリソースを強化することができた。参加青年はこれらの学びを持ち帰り、まずは自分のコミュニティで、そして世界の様々なプロジェクトや活動を通して多くの人にその学びを還元することができるだろう。全ての人が分け隔てなく質の高い教育に自由にアクセスできる可能性がある。

参加青年は、各セッションにおいてその場の聴衆となるだけでなく自らその場を作る側となる機会も与えられた。各セッションでは、教育問題に関するクリティカルシンキングの能力を高めることや、いつもよく考え、振り返りをすることを特に重視した。その結果､ディスカッションでのアイデア交換や各国と世界の現状の報告、状況を解決するための現実的な新しい提案を作り出す活動などを行い、参加青年にとって意味深い学びの場とすることができた。

コースは、中心となる五つのセッションと、開始時の導入セッションからなり、中間には各参加青年の理解度を確認するためのフォローアップセッションを行った。各セッションでは、コースの目的に関連した非常に重要で根本的なテーマを扱った。

まずセッション１では、我々の生活における教育と学習プロセスの役割の重要性についての理解の共通基盤を作るため、コースの内容に関連した職に就いている参加者もそうでない者も基礎的な共通の知識を持てるようになることを目指した。そのほかに、このセッションでは人間性についても扱った。すなわち、人に寛容でいつも助けを差し伸べる態度についてである。また、神経多様性（Neurodiversity）及び包摂的教育という概念とその重要性について学んだほか、感情教育という概念、その重要性、そして自分自身や仲間の成長に向けたその実際的活用法についても学んだ。これらを通して､我々は「誰も自分の持っていないものを与えることはできない」という結論に至った。つまり、人に何かを伝えたい、与えたいと思うなら、まず自分自身の中にそれらを育み、自分自身が手本となる必要があるということである。

セッション２では、世界各国の様々な教育システムの特質や傾向について学ぶことを目指し、その目的を果たすことができた。まず様々な教育システムの共通点や特異性を知り、次にそれぞれの長所や短所を分析することで、各システムが用いられている実際の状況下での可能性や危険性を明らかにすることができた。

セッション３では、ここまでのセッションの内容を振り返って視点を広げ、教育というテーマに関してさらに幅広い批判的視点からのアプローチを探した。また、各参加青年の日々の暮らしの中で、社会にどのように大きな影響を与えられるのか、新しいアイデアを生み出した。これらの活動を通して、コミュニティの発展を目指す活動をする際に必要な理論的な基盤を構築することができた。

セッション４では、参加各国で見られる教育分野での既存の活動や事業などを分析し、そのような活動や事業が発展し、成功するための要因を探った。さらに、参加青年各自が教育界に新しい考え方をもたらせるようなアイデアを探った。

最終セッションでは、コース全体の内容を振り返り、身に付けたスキルに対する認識を深めることを目的とした。また、実行可能な活動を生み出せるように、教育カリキュラム、体系的に概念化する方法、計画の実施と評価に関する基本的な知識を提供した。

報告を終えるにあたり、大切な点に触れておきたい。それは、各参加青年が感情をうまくコントロールできるように、コースと並行して、いつも心の知性の育成が行われていたということである。これによって、安心して学べる環境を作り出すことができた。各自の個人的評価とグループでの評価から、コースの最初に設定した目的が達成されたことが見て取れる。参加青年は皆、それぞれの置かれた状況の中で、それぞれのコミュニティで、プラスの変化を生み出したいという強い意志を持っている。個人的なプロジェクトもあればグループでのプロジェクトも見られる。どのプロジェクトにも、本コースで得たリソースと知識が活用されることになるだろう。

2) お互いを高め合う実践型エンパワメントコース

副題：自分のため、そして私たちのために生きる

ファシリテーター：ポール・ファリス

参加青年：32 名（日本参加青年 17 名、外国参加青年 15 名）

1. コース概要

参加青年は、自身と他者をエンパワーする方法を吟味し、練習し、それについてディスカッションする。エンパワメントコースは、明治 150 年記念「世界青年の船」事業でのリーダーシップに関する様々な活動をサポートし、またそれらについて話し合う。

2. コースの目的

参加青年は、小グループや大きなグループでのディスカッション、さらに発表やワークショップ、様々なアクティビティ、個人的経験、仕事上の経験、本事業に参加した経験を通して個人のエンパワメントと集団のエンパワメント、そしてディスエンパワメントについての理解を深める。

習得する能力：

① 参加青年はクリティカルシンキング能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を培う。これは、安心して質問したり答えたりでき、自分の弱さも含めて正直にさらけ出せるような心地良い環境の中で行われる。

② 背景や意見が異なっていたり様々な違いがある人に対しても敬意を払い、価値を認め、耳を傾け、そして積極的に励ます。

③ それぞれのアイディアを共有し、自身と他者をエンパワーする。

3. セッション概要

セッション 1：自分のプレゼンテーションで人をエンパワーするには	
目的とねらい	活動の内容
■ 人をエンパワーするレッスンについて話し合う。 ■ 人をエンパワーするために知っておくべきことは何か。	■ 2 分間レッスンと刺激を受けたアートの共有。 ■ 人をエンパワーし、また自分がエンパワーされるためには、どのような姿勢を示す必要があるか。 ■ 良いプレゼンテーションとは何か。 ■ ビデオ：「Cultural perspectives（様々な文化的視点）」
セッション 2：リーダーシップとは何か	
目的とねらい	活動の内容
■ エンパワメントに対するイメージを持つ。 ■ エンパワメントの特徴を探る。	■ 2 分間レッスンと刺激を受けたアートの共有。 ■ エンパワメントにおける感情の役割を話し合う。 ■ 好奇心と共感を定義する。 ■ リーダーシップとは何か。 ■ ビデオ：「Acts of Leadership（リーダーシップを示す行動）」
セッション 3：あなたの世界	
目的とねらい	活動の内容
■ 本事業でこれまでに直面した課題について振り返る。 ■ 参加青年の生活を見渡し、適用性の共通する点を話し合う。 ■ 事実（ファクト）とは何かを理解するとともに、自分の知らないことに意識を向けることの大切さを理解する。	■ 2 分間レッスンと刺激を受けたアートの共有。 ■ 蜘蛛の巣モデルを作り、相関性について話し合う。 ■「集合的個人主義」とは何か。 ■「Together I Shine（一緒にいるから私は輝く）」は何を意味しているか。 ■ チームがどのように良いプレゼンをするかを探る。 ■「知られていること」と「知られていないこと」について話し合う。
セッション 4：個人レベルのコミュニケーションからグローバルなレベルのコミュニケーションまで	
目的とねらい	活動の内容
■ エンパワメントやディスエンパワメントに関連して意図せずに生じる因果関係を学ぶ。	■ 2 分間レッスンと刺激を受けたアートの共有。 ■ 招致教育（invitational education）について話し合う。 ■ エンパワーできるコミュニケーションの哲学とは何か。 ■ ブリスベンでのアルバートパークスクール訪問を振り返る。 ■ 各自での考察、グループディスカッション、チーム全員の前で行う二人でのディベート：あなたが人生でする最も大切な決断は何か。
セッション 5：エンパワメントそのものになる	
目的とねらい	活動の内容
■ 仲間とつながり続ける方法と、エンパワメントを一生続く学びや個性の一部にする方法を話し合う。	■ 2 分間レッスンと刺激を受けたアートの共有。 ■ パワーとは何か。 ■ 個人としてのパワー、そして立場上のパワーについて話し合う。 ■ エンパワーされた、又はディスエンパワーされた経験を共有する。

4. ファシリテーターのコメント

好奇心と共感にあふれる明治 150 年記念「世界青年の船」事業の参加青年は、自身と他者をエンパワーするというテーマについて探求した。参加青年たちは、日本での地方プログラムや、東京、那覇、オーストラリア、ソロモン諸島、そしてにっぽん丸の船上で、本プログラムならではの充実した形で、個人としての学びやグループでの学びの機会を与えられた。本事業の参加青年は明らかに高い能力と意識を持ったリーダーであり、これまでの人生経験もこれからの経験も確実にいかせる人たちである。エンパワメントチームでは、計画と振り返りの重要性を学んだ。それは、発表の内容以上に物事を形にする方法が人をエンパワーするのだという学びでもある。参加青年たちは女性も男性も、自分自身をエンパワーするための鍵となるのは、知らない物事について自分に正直になることだということを理解した。エンパワメントチームのメンバーは、人それぞれの向上や個人的成長をお互いに支え合えるような環境を作りたいと考えており、そのために自分の接する人々が物事をリードする機会を提供していく。それは、集合的個人主義という枠組みの中では「一緒にいるから私は輝く（Together I Shine）」からだ。

私がエンパワメントチームのメンバーに望むのは、これからしていくことについて完璧な選択をするよう努力してほしいということではない。それよりも、それぞれが自分の興味のあることに邁進し自分の全能力をそこに注ぎ込んでほしい。人生には様々なつまずきもあるだろうが、その中でエンパワメントチームのみんなは、この事業で体験したのと同じように学びを得、そして気持ちの上での立ち直りを見せていくだろう。チームメンバーの人生やそれが後に残していくもの（レガシー）は、それぞれが人生をどう生き、人々にどう接していくかにかかっている。「世界青年の船」事業は、参加青年の人生という旅路における一つのステップである。その人生でそれぞれが自分の成長や達成を比較すべき相手は、過去の自分だけだ。

参加青年からのコメントを以下に掲載する。

I.（タンザニア）

エンパワメントコースの中で、私は二つの大きな意義深い成果を得たと考えている。これらは、短期的にも長期的にも私の人生に影響を与えることになるだろう。一つ目は、プレゼンテーションの準備の大切さだ。これはとても重要な学びとなり、本事業の中で企画者となり開催した起業セミナーでは、これまでにしてきた発表と比べて改善が見られた。話の流れを詳細に準備し、さらに想定される質問とその答えも準備しておいたため、ステージに立ったときかなり自信を持つことができた。そして私自身がエンパワーされ自分を信じているという状態そのものが、話を聞く人たちにポジティブな影響を与えた。私は若い起業家という立場をいかして、起業に興味はあるものの自分の能力などに自信がなくて二の足を踏んでいる参加青年たちを対象に、ディスカッションの場を設けた。その集まりで私は、エンパワメントコースでいつも使われている、「あなたを信じ、あなたを支えます。」という言葉を共有した。私のアドバイスを受けて、一人の参加青年は帰国したら新しいビジネスを立ち上げることになった。これは、私たち若者がお互いに影響を与え合い、エンパワーし合うというコンセプトを形にできた良い例だと思う。

最初のクラスから最後のセッションまで、国立オリンピック記念青少年総合センターでの研修から、船の上、そして課題別視察などどこへ行っても、私はエンパワメントコースに参加できて良かったと感じている。このコースでは、一つ一つの場面が全て新たな学びだった。良い聞き手でいることの価値やディスカッションに貢献することの価値、自分の国やコミュニティで良いリーダーになる方法、他者と自分自身をエンパワーする方法など、全てが忘れられない学びとなった。これらをタンザニアの人々に、そして世界に広めていきたいと思う。

II. 秋保沙保里（日本）

エンパワメントコースでは、まさに現実に展開する「世界青年の船」事業の環境を実践の場として、自ら学びを得るための方法や気付きをたくさん与えてもらった。

まず、船の中で起こった出来事について、メンバーがそれぞれの想いを語る場面では、考え方の違いや気付きを共有することの面白さ、安心して自分の言葉で表現することができる環境の大切さを実感した。また、自由にプレゼンテーションを行う 2 分間レッスンや蜘蛛の巣モデルなどの活動を通じて、自分自身を知ること、そして他者の視点で考え、好奇心を持ってつながりを広げていくこと、他者を招き入れるなどの、エンパワメントのプロセスを知り、船上の様々な場面で身をもって学ぶことができた。エンパワメントコースで過ごした時間は、私のプログラム中の生活において、本当に大切な時間だった。一緒に学んだエンパワメントチームの皆さん、本当にありがとうございました。

3) グローバル・シティズンシップコース　～多文化共生時代の地球市民になるために～

副題：グローバルな視野と価値観を養い、体現できるようになるために

ファシリテーター：マイク・マツノ
参加青年：33 名（日本参加青年 17 名、外国参加青年 16 名）

1. コース概要

参加青年が真にポジティブな変化をもたらし、より良い社会やより良い世界を作ることに貢献するにはどのような取組姿勢や根本的な価値観、そしてベストプラクティスが必要なのか。これらを定義づけ、発見し、それらを培い、それらについて熟考することがグローバル・シティズンシップコースの目的である。そしてこのような活動を通して、真のグローバルリーダーやグローバル・シティズン（地球市民）になるために必要な資質や能力、スキルなどを明らかにできるようになることも目指している。本コースでは、「世界青年の船」事業のコミュニティを世界の縮図に見立てている。様々な場所でのディスカッションや、参加型のディベート、クリティカルシンキング、問題解決、そしてアクティブラーニングを通してクラスでの学びを実践し、自分自身がどんな資質を大切だと考えているかや実際に持っているかを、体験を通して自ら意識するようになることが期待されている。

2. コースの目的

コースのねらいは、グローバル・シティズンとしての資質を身に付けるにはどのような思考過程やソフトスキル、知識、そして経験が重要なのかを、短い発表やレクチャー、グループディスカッション、ディベートなどを通して理解し、それらを分析し、定義することである。参加青年は、学んだ知識と船上での経験を評価し、さらに実践でいかすことができるようになる。それらをもって他の全ての参加青年たちとの関係をより良いものにし、グローバル・シティズンに共通する資質についての理解を深めることができるだろう。

3. セッション概要

セッション 1：異文化環境における比較印象	
目的とねらい	活動の内容
■ コースの全般的な目的とねらいを学ぶ ■ グローバルなコミュニティを作り、全ての参加青年にとって安心できる空間を作る ■ 異文化コミュニケーションにおける基礎的なコンセプトと考え方を理解する ■ 異文化コミュニケーションにまつわる出来事に関して、船内でより敏感になるための方法を学ぶ	■ コースの概要や期待されることを紹介すると同時に、コースとしてのコミュニティ作りのきっかけを与え、誰でも安心して質問したり意見を言える空間を作る ■ グループアクティビティ：元気を引き出す自己紹介とチームビルディング ■ 異文化間の出来事に関する短い講義 ■ 異文化間の出来事やコンセプトについてのグループディスカッション ■ このような考え方が本事業内でどのように適用できるかを検討する ■ 船上でどのような異文化間の出来事が発生し得るかを考える
セッション 2：世代幅のある職場での出来事	
目的とねらい	活動の内容
■ 世代幅のある職場の長所、短所、課題を理解する ■ 職場がミレニアル世代に期待することを学ぶ ■ 世代幅のある職場でより成功するための新しい考え方を作り出す ■ 異なる国や文化において、世代幅のある職場が、異文化間の出来事と並んでどのように難しい課題となるのかを理解できるようになる	■ 職場における世代の違いと、その定義に関する講義 ■ 世代の違いに関するロールプレイ ■ ロールプレイを振り返り、何を学んだかを話し合う ■ 世代の違うメンバーが一緒に働く職場におけるグループ力学と個人の動きについてのグループディスカッション ■ 世代間ギャップを埋める方法の案と、効果的な職場環境を作るための案を出し合う
セッション 3：メディアインフルエンサーの役割とそのインパクト	
目的とねらい	活動の内容
■ 現在のメディアインフルエンサー（メディアを通して影響を与える人）を特定し、なぜそうなっているのかを知る ■ ソーシャルメディアが持っているパワーとその影響の範囲を、他のメディアとの比較の上で理解する ■ 国によってどのように異なるソーシャルメディアが使われているか、また、その理由を学ぶ ■ 社会や世界をより良くしていくために、若者たちがソーシャルメディアをどのように利用することができるかについて実際的なアイディアを出す	■ メディアインフルエンサーについての講義 ■ 国によって使われているソーシャルメディアが異なる様子と、それぞれの人気の背景について話し合う ■ 社会や世界をより良くしていくために、若者たちがソーシャルメディアをどのように有効活用できるかについてアイディアを出し合う ■「世界青年の船」事業のイメージやブランドを向上させ、効果的に宣伝するために、どのようにソーシャルメディアを利用できるか、グループでディスカッションする
セッション 4：変化し続ける世界の中での変革型リーダーシップ	
目的とねらい	活動の内容
■ 交換型リーダーシップと変革型リーダーシップの違いを理解する ■ 変革型リーダーの持つ固有の資質やスキルを見つけ出す ■ それぞれの国のリーダーたちがどのような資質を持っているか、そして人々からどう見られているのかを学ぶ	■ 変革型リーダーシップに関する短い講義 ■ 変革型のリーダーになるために必要な固有の資質やスキルをグループで話し合う ■ 現在の世界のリーダーたちの持っている資質について話し合う ■ 人はどのようにして変革型のリーダーになるのかについてアイディアを出し合う ■「世界青年の船」事業の中でより良いリーダーになるには何ができるか、アイディアを出し合う ■ 現状での「世界青年の船」事業におけるリーダーシップについて話し合い、どの面で改善ができるか提案する
セッション 5：グローバル社会における「愛情の物語」	
目的とねらい	活動の内容
■ 自身の文化の中での愛情のコンセプトを共有するとともに、他の文化では愛情がどのように表現されるのかを学ぶ ■ 様々な国の社会や文化の中で愛情がどのように示され、表明され、形にされるのかを理解する ■ 国際結婚の長所と短所を学ぶ ■ 様々な国での恋愛や結婚に関する習慣を理解する	■ 異なる文化の中で愛情や恋愛がどのように定義されているかを話し合う ■ 愛情の表現方法や愛情の価値についての自分の経験を共有する ■ 国際結婚と国際恋愛の長所と短所についてディベートする ■ 恋愛と結婚にまつわる各国での様々な習慣や儀式を説明し合う ■ どんな人が自分の理想のパートナー / 連れ合いかを話し合う。その人は自分と同じ国や文化の人であるべきか。それはなぜか、またはなぜそうでないか

4. ファシリテーターのコメント

異文化コミュニケーションを扱った最初のセッションは順調に進み、コースの参加青年は全員内容を理解し、セッションに参加することができた。国立オリンピック記念青少年総合センターでの石井晴子先生による異文化コミュニケーションのセッションがあるとはいえ、特に日本参加青年はこの分野に関するさらに多くの知識や経験、そのような場に接する機会が必要と思われる。

セッション 2 で扱った世代幅のある職場というテーマは、コース参加青年の 90% が大学生で職場経験がなかったため、実際的でも実用的でもなかった。また、このセッションで用いた内容がどちらかというとアメリカ的視点からのものであること、用語や基礎知識が必ずしも皆に共有されていないことに気付かされた。次にこのような機会があるならば、セッションのテーマは 21 世紀の職場で成功するために必要な仕事上のスキルというものにし、このテーマと関連付けて、実際に働く職場で世代幅がどのように各自に影響するかを話し合うことにしたい。

ソーシャルメディアとその利用方法に関するセッション 3 はとても実用的で、コースメンバーは小グループでのディスカッションを楽しみ、ポスターを作成して全体での発表をした。このセッションの主な目的は、社会に影響を与え世界的なインパクトをもたらし、さらに自分の取組によって収入を得られるようにするためにソーシャルメディアをどのように用いるかについてアイディアを出し合うことであった。このセッションは順調に進

んだ。ただし、もし次回行うとすれば１点だけ変更したいと思う。各小グループから全体へ発表するというスタイルを変更して、自由に見学するポスターセッションの形にすることで、発表者と聴衆の質疑応答を活発にさせ全体の進行も早めるようにしたい。

変革型リーダーシップを扱ったセッション４では、セッション１で学んだソフトスキルの重要性に参加青年の意識を向けること、さらに参加青年が交換型リーダーシップと変革型リーダーシップの違いに気付くことを目指した。この回ではやや長めの講義を行った。それぞれのリーダーシップスタイルの違いに関する参加青年の理解が不足しており、各自の持つ基礎知識にも大きな差があって、ロールプレイやグループディスカッションをすることが現実的ではなかったためである。

最終セッションであるセッション５では、異なる文化や国の関係、そして国際恋愛を扱った。これは、想定どおり参加青年にとって大変興味の持てるテーマであり、楽しむことができた。参加青年は、異文化間や異国間でのデートや恋愛、結婚など多様なテーマについて様々なレベルでのディスカッションをした。

グローバル・シティズンシップコースは、全体として順調に進行したと考えている。このコースが、今年初めて開講されたコースであることを考えると特にそう言えるだろう。やる気にあふれ、非常に優秀な33人の参加青年と接し、このコースを共に進めることができたことは、私にとって大変光栄であり、またとない大きな喜びである。コースメンバーの多様性も非常に興味深く、この多様性がコースをこれほどまでに学びの多い場にしたとも言えよう。今後コースをより良いものにするために私自身にできることとして、日本参加青年がグループディスカッションでもっと発言するように励ますようにしたい。また、自分自身がもう少しゆっくり話すことと、必ずしも皆に理解されるわけではないことに気付いたアメリカ的用語や表現の使用にも注意したいと思う。個人的にコメントをくれた人たちや、事業終了後にメッセージとして送ってくれた人たちがいるが、どのコメントもとてもポジティブなもので、多くのメンバーがこのコースからたくさんのことを学んでくれたようである。

4) グローバルヘルスコース～予防可能な疾病と世界の健康・保健～

ファシリテーター：パトゥ・マシカ・ムスマリ
参加青年：34名（日本参加青年18名、外国参加青年16名）

1. コース概要

本コースでは21世紀に起こっているグローバルヘルス（グローバルヘルス…地球規模の健康・保健とそれにまつわる諸課題）の課題について参加青年の意識を高め、それぞれが解決に向けてどのような役割やリーダーシップを担うべきか考えてもらうことが最終目的である。参加青年はグローバルヘルスの分野でリーダーシップを発揮するために必要な知識とスキルを習得する。

2. コースのねらい

本コースを通して参加青年は：

① グローバルヘルスのコンセプトを理解し、世界の健康・保健分野を発展させる枠組みについて理解する
② 21世紀の主要なグローバルヘルスの課題について説明できる
③ 主要な感染症と非感染性疾患について理解する
④ 健康の社会的決定要因と国内と国外での健康格差について理解する
⑤ グローバルヘルスの課題解決に取り組むためには協調行動が必要であることを理解する
⑥ グローバルヘルスを向上させるための個々の活動を見直す

3. セッション概要

セッション 1：グローバルヘルスの概念、最新動向、SDGsにおける位置づけについて	
目的とねらい	活動の内容
■ グローバルヘルスとは何かを説明できる ■ 近年の世界的な健康課題について説明できる ■ SDGsにおける健康課題について理解する	■ コース概要や進め方の説明、このコースにおけるルール作り、コース達成目標の共有 ■ グループワーク：自己紹介 ■ アイスブレーク ■ 講義：SDGsにおける健康課題について ■ グループディスカッション：世界の健康課題の中で、出身国でもSGDsにおける健康課題の中で問題となっているものについて小グループで意見交換し、参加国間の共通課題を挙げ、その後全員に向けて発表する

セッション 2：死亡および疾病負荷の主な要因について - 感染症と非感染性疾患	
目的とねらい	活動の内容
■ 世界的の死亡および疾病負荷の主な要因について学ぶ ■ 国ごとの主要な感染症と非感染性疾患の類似点・相違点について把握する	■ 講義：世界の死亡および疾病負荷の主な要因について ■ グループディスカッション：主要な感染症と非感染性疾患、およびそれぞれの主な要因について小グループで討論する ■ グループディスカッション：出身国における主な感染症と非感染性疾患について小グループで意見交換し、その後全員に向けて発表する
セッション 3：健康の社会的決定要因について	
目的とねらい	活動の内容
■「教育」、「経済」、「貧困」、「文化」、「ジェンダー」、「政治」、「戦争」などがなぜ健康に影響するか理解する	■ 講義：「健康の社会的決定要因」について ■ グループワーク：「社会」、「文化」、「経済」、「環境」、「戦争」、「ジェンダー」のうち一つを選び、各グループでなぜ健康に影響するのか討論しながら、関連する要因について関係図を作成し、他のグループに共有する ■ アイスブレーク ■ プレゼンテーション：出身国ごとに健康に影響する社会、文化、経済、環境、戦争、ジェンダーの課題に関する具体的な事例を全員に共有する
セッション 4：国際保健政策について	
目的とねらい	活動の内容
■ 国際保健システムの主たる機能を学ぶ：国際保健規則とたばこの規制に関する世界保健機関枠組条約について ■ どのように保健医療システムが組織されているか把握する	■ 講義：保健医療システム、保健医療政策の主たる機能について理解する ■ アイスブレーク ■ グループディスカッション：以下2点に関連する事例紹介 1) たばこの規則に関する世界保健機関枠組　2) インドにおける母体及び幼児の健康状態改善のためのファイナンシャルプロジェクト
セッション 5：グローバルヘルス対策における協働	
目的とねらい	活動の内容
■ グローバルヘルス向上における個々の役割とリーダーシップについて理解する	■ グループワーク：グローバルヘルス向上方法について考える。ウガンダの月経における健康についての事例紹介 ■ リフレクション：コース内容、理解について振り返る

4. ファシリテーターのコメント

グローバルヘルスは医学的背景の有無にかかわらず個々が大いに貢献できる分野である。現代の青年は持続可能な開発目標（SDGs）にもあるように、グローバルヘルスの課題解決を推し進める重要な存在であると考えられている。「世界青年の船」事業は青年がグローバルヘルスコミュニティを完成させるための自身の役割やリーダーシップについて考えるプラットフォームとなった。

今年度のグローバルヘルスコースは医学的背景の有無にかかわらず青年たちのニーズに合っていた。重要な結果の一つとして、青年たちはコースを通してグローバルヘルスのコンセプトを理解し、国際社会で生きる者として皆がグローバルヘルスの課題に対するリスクを抱え、同時にそれを解決に導く行動を起こせる可能性を秘めていることを各々持ち帰ることができた。最も重要なのは、グローバルヘルスの問題及び解決策はヘルスの分野を越えて教育、農業、食糧安保、移住、取引、環境など様々な分野に関係していると青年たちが理解できたことだ。この成果はファシリテーターがアフリカで行った実生活に起こるグローバルヘルスの研究事例や世界各地で起こった事例についてディスカッションを行ったことで得られたものだ。特に、健康の社会的決定要因についてのディスカッションでは、参加青年は健康と社会、経済、政治的な側面とのつながりを理解することができた。そのため、参加青年は医学分野で活動していなくても個々の活動がグローバルヘルスを向上させられることを実感した。

本コースはグローバルヘルスと関係する活動を行っている参加青年が、各々の活動を紹介する場にもなった。この目的は、参加青年が行っているグローバルヘルスに関する活動について聞くことでお互いに高め合うことだ。結果、4名の参加青年が次のトピックで発表を行った。甘茶の紹介を日本参加青年の馬場梓さんから、癌患者の子どもたちに対する活動を外国参加青年のソフィー・エルモシヤさんから、HPV（ヒトパピローマウイルス）の

事例紹介を日本参加青年の木戸大輔さんから、チリの環境プロジェクトについて外国参加青年のフィリッポ・サイトさんから発表してもらった。これらのプレゼンテーションはコースに参加する全青年から評価され、質の高いディスカッションをする機会になった。

最後に、日本の課題別視察で訪れた国立国際医療研究センター、オーストラリアの The Menzies School of Health Research と Headspace National Youth Mental Health Foundation では、グローバルヘルスが抱える課題として母体と幼児の健康、感染病と抗菌薬耐性、メンタルヘルスなどについて学ぶことができた。各訪問先で紹介された内容はどれもコース内容に沿っており大変クオリティの高いものであった。

5) 国際協力コース

副題：難民が発生する原因、彼らを取り巻く問題、そして支援について考える

ファシリテーター：山村順子
参加青年：31 名（日本参加青年 17 名、外国参加青年 14 名）

1. コースの目的

本コースでは、「国際協力」の精神を持ち、世界規模の課題を自分の課題と捉え、国の枠を越えて活動できるような視点を得ることを目的とする。また、異なる背景の人たちとともに同じ事象について考えることで、物事の多面性を認識することも目的としている。

今回は「難民」というテーマを設定しているが、この問題についての知識をただ深めるだけではなく、先進国、開発途上国、難民を多く受け入れている国、受け入れていない国など、置かれた立場の異なる国の青年たちが異なる視点から意見を共有し合い、お互いに学び合うプロセスを重視する。

2. コースのねらい

本セミナーでは国際協力に関するトピックの中でも、近年大きなテーマとなっている「難民」の問題、そして難民を生み出す原因の一つである「(武力) 紛争」について、様々な視点を取り入れながら考える。また、「難民」をどのように支援すべきか、といったことも、他国からの参加青年たちと議論し、発展させる機会を持つ。コースを通し、国の枠を超え、地球規模の課題に目を向け、地球市民として異なる国の人たちと連帯・協力し、自分なりに行動できる人材になることを目指す。

3. 各セッションの概要

セッション 1：難民問題に対する各国の努力と課題について知ろう	
目的とねらい	活動の内容
■ 難民問題について、各国の認識を知り、どのような議論が存在するのかを知る ■「難民」の意味と難民の背景の多様性を理解し、「難民」という言葉が単純ではないことに気付く ■ 難民を発生させる原因となっている背景を多面的に分析する	■ プレゼンテーション（クイズ形式） ファシリテーターによる難民の統計データや国連の定義に関するプレゼンテーションが行われる ■ グループワーク それぞれ難民のイメージと定義を各グループで書き出す。そして、「誰が難民になるのか」について意見交換し、クラスで共有する ■ プレゼンテーション＆質疑応答セッション 難民を受け入れている国（オーストラリア、スウェーデン）の参加者からその国の努力、政策、そして人々の認識、政策を該当国から共有する。その背景にどういった価値観や考え方があるかも共有する 難民の受入数が少ない国（日本）の参加者から、政策や人々の認識、そして受け入れていない理由に関するプレゼンテーションを行う ■ グループワーク 各グループで難民が発生する理由は何か、意見交換する ■ 課題別視察への導入 ファシリテーターによる訪問先 “WELgee” の説明

セッション 2：「紛争」はどのように起こる？	
目的とねらい	活動の内容
■ 難民を発生させる（武力）紛争の原因について考える ■ 宗教が紛争の原因ではないが、個人のアイデンティティに強くかかわる要素は対立を助長するために利用されることがあることを知る	■ プレゼンテーション ファシリテーターが前回の補足プレゼンテーションを行う。「国内避難民」とは何か、前回の最後のグループワークでどのような意見が出たかを振り返り、コメントする ■ ワークショップ IC 国（自分たちでルールを定められる架空の国）における 10 日の国民の祝日を、異なる宗教グループの間で設定する 1．各宗教グループの間で議論する 2．各グループのリーダーたちで、交渉会議を行う 3．IC 国・国民の休日決定のアナウンス ■ 次回のグループワークのための導入 ファシリテーターによるケーススタディを用いた「紛争マップ」の作り方に関する説明が行われる

セッション 3：（武力）紛争を分析してみよう	
目的とねらい	活動の内容
■ 紛争マップを作成して、紛争を分析する ■ お互いに協力し、異なる視点から（武力）紛争解決の糸口を発見する ■（武力）紛争の要因を取り除くことについて考える ■ 構造的暴力の存在に気付き、紛争アクターに影響を及ぼす隠れた力に気づく ■（武力）紛争の複雑さを理解し、第三者がいかに状況を悪化させ、当事者たちが（武力）紛争を解決するのを妨げるかに気付く	■ 個人ワーク 紛争マップを描く（参加者は1．SWY ランド紛争の例 2. 複雑な三角関係のケーススタディ、そして世界における 100 の紛争、もしくはその他、から選ぶことができる） ■ グループワーク 類似したテーマを選んだ参加者同士でグループになり、（SWY ランドチーム、三角関係チーム、その他）紛争マップを共有する。その際、下記の点を考慮に入れる。 1．マップを作成して何に気付いたか。あなたの視点は変化したか 2．問題を解決するのに今までどんな努力が払われたか、どんな努力がなされるべきか ケースごと、クラス全体に共有する ■ プレゼンテーション ファシリテーターによる各ケースに対するコメントのあと、（武力）紛争が起きる理由について、「人間の基本的欲求」理論に基づいた説明を行う ■ ワークショップ 「人間知恵の輪ゲーム」：10 人程度で一つのチームを作る。リーダーを一人選び、その人は部屋を出る。その人以外は手を繋いで輪を作り、ファシリができる限り絡まらせる→リーダーが帰ってきてほどこうとする→ファシリテーターより解説する

セッション 4：難民をどのように支援する？	
目的とねらい	活動の内容
■ 難民や（武力）紛争について勉強したあとで、これらが起こらない世の中にするにはどのようなアクションができるか、議論する どんな考え方が現場にいるエイド・ワーカーに求められるのか、SWY の精神と結びつけて理解する ■ 個人の尊厳を大事にしながら難民のニーズを理解する ■ 難民も多様なニーズを持った自分たちと変わらない人間であることを理解する	■ プレゼンテーション＆質疑応答セッション 難民受入国（タンザニア）の経験を共有する 1．どんな支援が提供されたのか 2．なぜ彼らは難民となったのか（アフリカの政治事情と紛争に関する導入） ■ プレゼンテーション ファシリテーターが「エイド・ワーカーになるために必要なこと」の自らの失敗談含めたプレゼンテーションを行う ■ ロール・プレイ 「難民」か「入管スタッフ」に分かれてロール・プレイを行う。「入管スタッフ」は「難民」のニーズを傾聴する。その後、ファシリテーターからロール・プレイの意図に関して解説を行う

セッション 5：(武力) 紛争のない世界、難民が発生しない世界のために	
目的とねらい	活動の内容
■ 難民や (武力) 紛争について勉強したあとで、これらが生じない世の中にするにはどうしたらよいか考える ■ 状況を改善するために、青年リーダーとして各国政府や国連に要請をすることで啓発活動の体験をする ■ 下船後であってもお互いに支え合うためにSWYネットワークが重要であることを認識する	■ プレゼンテーション＆質疑応答セッション 難民を受け入れている国 (トルコ、チリ、エクアドル) からの参加青年による発表を行う。また、気象災害により島民が島を出なければならない状況に関して、将来気候変動による難民が生じる可能性のあるバヌアツの参加青年に発表してもらう ■ グループワーク 四つの国のグループに分かれ、どうしたら状況を改善できるかを話し合う。また、各国政府もしくは国連に要請する内容も考える。四つのグループは下記のとおり。 1．難民の出身国 2．難民を今も昔もあまり受け入れていない国 3．難民を今も昔も多く受け入れている国 4．難民をかつては多く受け入れていたが、最近は受け入れる数を減らした国 各グループは話し合った内容を全体に共有する

4. ファシリテーターのコメント

当コース・ディスカッションは、参加青年が多岐にわたるトピックにおいて、常に議論を楽しんでくれたお陰で、大いに実りがあったように思う。基本ルールは参加青年たちによって決定され、コースの間中その原則は忠実に守られた。参加青年たちは皆、文化・宗教・民族集団や経済的背景の違いにかかわらず、お互いを尊重する様子が見られた。課題別視察では、青年たちはシリアやアフリカからの難民に会う機会があり、小グループで会話をした。その際、青年たちは知識と経験を組み合わせて地球規模の問題を自分たちに関連付けて考えることができた。各寄港地活動後は、振り返りの回を持ち、各自の経験に基づき、多様な見解を共有した。参加青年たちは各地にある社会問題について議論し、特に沖縄とブリスベンの後は白熱した議論となった。また、コースを通し、各国1～2名の参加青年が自分たちの国で今起こっている難民問題に関して発表した。参加青年から発表者に対し、毎度多くの質問がなされ、他国の問題を身近に感じる様子がうかがえた。さらに、寄港地活動での「先住民の人権に関する座談会」「二酸化炭素排出量交渉ゲーム」の際に感じた疑問や違和感もコース内で共有された。途上国出身者から「先進国の目線で進められ、ゲームにうまく参加できなかった」という声、先住民から「先住民を保護する際は文化だけでなく、言語もきちんと保護すべき」との問題提起があり、多くの国が関わる課題を当事者からの指摘に基づいて多面的に考えられる良い機会となった。

初回のワークショップでは、参加者が異なる背景を持つ人たちと一つの決定をすることの難しさを経験した。参加者は宗教ごとにグループに分かれ、ワークショップは実践的で興味深いものとなり、コース外でも引き続き議論された。他のワークショップでは、「当船は日本への帰船が叶わず、ギリシャに難民として受け入れてもらうことになった」と告げられ、難民への支援を自分の問題として現実的に考える機会を持った。参加青年たちは常に前向きで、困難な課題がある場合でも、意欲的に取り組んでいた。時折、ファシリテーターによるプレゼンテーションがいくつかのトピックに基づいて行われた。「パレスチナにおける難民」「沖縄における基地問題」「NGOの役割」「緊急支援」「エイド・ワーカーになるために大切なこと」等。ファシリテーターとして、異なる背景を持つ全ての参加青年が楽しめる手作りのワークショップを考案することは大きな挑戦であったが、参加青年たちの活発な参加により、毎度非常に興味深いセッションを作ることが可能となった。また、当コースの準備・運営に関わってくれた管理部スタッフを始めとする多くの方々に感謝の意を表したい。

6) 情報とメディアコース

ファシリテーター：サマンサ・ハビエル
参加青年：31名（日本参加青年17名、外国参加青年14名）

1. コース概要

情報とメディアコースの目的は、メディアと情報に関する基礎的な理解を提供し、それらがコミュニケーションの手段そして個人の成長や社会の発展をもたらすツールとして果たす役割を学んでもらうことであった。また、情報やメディアの提供するものを利用する際に必要な、創造的思考やクリティカルシンキングの能力を培う場を提供することを目指した。

今日のメディアに関連する様々なチャンスや課題について、その経済的、教育的、社会的、また政治的な側面から吟味した。ソーシャルネットワーク上に偽情報（フェイクニュース）がはびこる状況の中で、参加青年が創造的思考とクリティカルシンキングを実践できるようになること、そしてメディアと情報の責任ある使い手また有能で適格な提供者となることが、このコースの最終的な目的であった。陸上研修及び寄港地間に行われた船上研修と対をなすものとして、東京、ダーウィン及びブリスベンでの課題別視察が準備された。

2. コースの目的

情報とメディアコースでのコース・ディスカッション終了時に、参加青年は以下のことができるようになる：

① 自分自身の言葉で、メディア･情報リテラシー（MIL）とは何かを説明する
② 情報とメディアの賢明な提供と利用を促進するために個人またグループでできる具体的な行動計画を提案する
③ 参加各国における現在の情報とメディアの全体的な傾向を比較する
④ 現在の高度にグローバル化し相互に緊密につながった世界の中で、MILの促進のために若者が行える具体的な行動案を提起する

3. セッション概要

セッション 1：コミュニケーション、メディア、そして 21 世紀的スキル	
目的とねらい	活動の内容
主な論点：21世紀型の学び手とはどんな人か ■ コミュニケーションに関する基本的な既成概念を崩す ■ 21世紀型のリテラシー ■ 公共放送をするテレビ局を見学 ■ ジャーナリズムの現場スタッフと接する	■ アクティビティ：グローバル・マイン・フィールド (地球的地雷原) ■ 東京渋谷にある「NHKワールド」のテレビスタジオとスタジオパークへ課題別視察 ■ NHKのジャーナリストとの質疑応答セッション：日本及び世界のメディア産業と公共放送分野における現代的課題と機会について
セッション 2：グローバル・メディアと情報経済における法的、倫理的、社会的な課題	
目的とねらい	活動の内容
主な論点：現在若者の直面しているコミュニケーション上のまた社会的な課題は何か ■ コミュニケーション上の課題 (例：報道の自由、偽情報 (フェイクニュース)) ■ 報道倫理と課題 (例：中傷、プライバシー、メディアの不正行為、盗用)	■ アクティビティ1：メディアを使う上での習性 (Our Media Habits) ■ アクティビティ2：問題分析樹形図 (Problem Tree) ■ 情報提供：メディアリテラシーとグローバル・メディアの状況に関する講義

セッション 3：メディアと情報の持つ力、マルチメディアで働くとは	
目的とねらい	活動の内容
主な論点：メディアはどのように生まれ、現在どのような状況なのか ■ メディアの歴史概観（産業革命以前から現在の情報化時代まで） ■ 21 世紀型の学び手が知っておくべきメディアリテラシー上の主な論点 ■ メディアは現実をどこまで反映しているか ■ メディアの習慣、慣例、そしてメッセージ（ビジュアルデザインと技術、写真撮影の基礎、ビデオ制作の基礎など）	■ アクティビティ 1：メディアの歴史に関する抜き打ちテスト ■ アクティビティ 2：テレビコマーシャルを読んでみる ■ 情報提供 1:メディアの歴史、メディアリテラシーの論点、メディアの習慣、慣例、メッセージ、及びメディアにおける現実の反映についての講義 ■ 情報提供 2：ビジュアルデザインと技術、写真撮影の基礎、ビデオ制作の基礎に関する集中講座。自国でプロの写真家、及びビデオ制作者として働く二人の参加青年にもファシリテーターとして加わってもらった。
セッション 4：メディアと情報に関するリテラシーを持った個人	
目的とねらい	活動の内容
主な論点：21 世紀型の学び手は、今日のグローバル社会をうまく渡っていくにはどのようにすべきか ■ メディアにおける美的感覚（例：カメラアングルや視点） ■ マルチメディアの輪 ■ メディアを読み取る：テキスト、動画、ビジュアル、ニューメディア、オーディオ ■ メディアの視聴者、製作者、そして利害関係者	■ オーストラリア、ダーウィンでのラジオ局 TEABBA への課題別視察。この局は、ダーウィンと周辺に住む先住民族コミュニティ向けの放送を提供している。 ■ チャンネル 7 テレビ局スタジオとクイーンズランド大学への課題別視察。この視察では、クライメート・リアリティ・プロジェクト（気候の現状を知るプロジェクト）を体験するとともに国連気候変動会議の模擬会議に参加した。また、気候の現状に関する意識を高め行動を変えさせる活動において、情報通信が果たす役割について振り返った。 ■ アクティビティ 1：カメラ・アングルと視点を話題にしたエナジャイザー（元気を出すアクティビティ） ■ アクティビティ 2：マルチメディア・クイズ ■ ディスカッションと情報提供：ソーシャル・メディア・プラットフォームの形態と例 ■ 配布資料：オーディオ・ビジュアル作品の原稿サンプル ■ まとめ：サマリー・フォーラムでの発表に向けた準備ミーティング
セッション 5：ニューメディアの苦悩及び社会変革のための情報通信	
目的とねらい	活動の内容
主な論点：情報化時代にあって、情報通信はどのようにコミュニティや社会の発展に貢献できるか ■ メディアにまつわる課題や問題、機会、挑戦、そしてメディアと情報の持つパワー ■ 社会の中で情報通信の果たす役割 ■ メディアの視聴者を特定し、視聴者調査の方法を探る ■ 貧困、持続可能な発展、そして社会変革における情報通信の役割	■ アクティビティ：メディアに関連する課題と問題マッチング ■ ディスカッション：メディアに関連する課題や問題についての参加青年の実体験（荒らし（トローリング）など） ■ 情報提供:社会における情報通信の役割、視聴者の細分化、視聴者調査、ブータンの国民総幸福量（GNH）のような開発指標など発展途上国、先進国双方での変革を創り出す触媒的役割としての情報通信の可能性 ■ 配布資料：持続可能な開発目標（SDGs）及び 2013 年「クイーンズランド大学社会変革のための情報通信賞」受賞者に関するケーススタディ ■ まとめ：ユネスコ「メディア・情報リテラシーに関する原理原則」を基にした主要論点と主な学びについてのまとめ。及びサマリー・フォーラムでの発表に向けた最終準備

4. ファシリテーターのコメント

メディアと情報に関するリテラシーを持った青年層を育成することは、これまでになく重要になっている。明治 150 年記念「世界青年の船」事業の参加青年は、そのほとんどがデジタルネイティブ世代（インターネットやパソコンのある社会に生まれ育った世代）であり、メディア分野で日々進んでいる変化の先端を生きる世代とも言える。これらの青年たちはインターネットの存在を子供のころから知っており、何か知りたい時にはインターネットが一つの必需品的ツールであると理解して育ってきた。導入セッションで行ったメディア利用習慣に関する簡単な聞き取りで、このコースの参加青年のほとんどが正にデジタルネイティブと呼べる人たちであることが明らかになった。非常に多様性に富んだこのチームのディスカッションを進行させる上で難しかったのは、メディアに関する知識の差であった。一部の参加青年がメディア業界で働いていたり同分野の学生であったりする一方で、その他の人たちはメディアに関して学び始めたばかりであった。経験や期待の幅が非常に大きなこのチームでバランスを保てるよう努力したことが、情報とメディアコースをとても色彩豊かで誰もが自分の場と思えるものにしたと言えるだろう。

コースの参加青年は、最初の週から順調なスタートを切った。帰納的な学びの形を重ねる中で、参加青年は NHK ワールドのテレビスタジオを訪問し、社会に情報を提供するメディア従事者の責任という点に関して興味深い洞察を得ることができた。この訪問中に話題となった上記の点や、現代のグローバルなメディア分野についてのその他の論点は、この後取り組むことになる問題分析樹形図（Problem Tree）の作成につながるものであった。このモデルの作成で参加青年は、それぞれの国で起きているメディア関連の問題だけでなく、その他の様々な問題に関しても取り上げることができた。格差問題、社会の安全、経済、青年の参加、健康と福祉、そして情報通信とメディアなどである。

船上研修では、参加青年は幅広いテーマに触れることになった。最初の取組は、コミュニケーションに関する基本的な既成概念を崩すことであった。参加青年にはより有能なメディアの発信者になるための方法を学び取ることが期待されているわけだが、研修ではまずメディアリテラシーに関する五つの基本的論点を心に留めながらメディアの中身を読むという手法について学んだ。その後、メディア制作における美的感覚についての集中講座を行った。この部分は、仲間である二人の参加青年も講師役で加わったため、他の参加者の学ぶ意欲はいつも以上に高まり、高品質なメディア製品に用いられる様々な手法について自分たちで積極的に学習した。

船上研修と対をなす形で、日本とオーストラリアでコースに関連する課題別視察が行われた。東京（NHK ワールド）、ダーウィン（TEABBA）、そしてブリスベン（チャンネル 7、クライメート・リアリティ・プロジェクト - クイーンズランド大学）での視察から様々な学びを得たが、これらは現状や社会を変革する上で情報とメディアが果たす役割ついてのその後のディスカッションの基礎を作るものとなった。

参加青年の持つ経験やコースへの期待には大きな幅があったが、情報とメディアの利用及び発信に関する基礎に立ち返ったことがバランスを保つ効果を発揮し、参加青年の興味を引き付け、各セッションに積極的に参加するよう促すものとなった。参加青年はメディアの世界がこれからも変わり続けていくことを理解し、その中で自分たちに求められることは変わらないということも学んだ。それは、新しい技術に対応して常に責任を持つこと、情報とメディアの信頼できる利用者であり、また発信者であるべきということだ。これほど多くの学びと洞察を得たことを考えると、明治 150 年記念「世界青年の船」事業の情報とメディアコースは次の言葉で言い表すことができるのではないだろうか。「最高のメディア体験」

7) ソフトパワーと青年外交コース

ファシリテーター：中沢聖史
参加青年：33 名（日本参加青年 18 名、外国参加青年 15 名）

1. コース概要

グローバル化と共に、情報化が進展した今日の社会において、ソフトパワーは自国の魅力を発信し、他国と対等に交渉を進めるために、ハードパワーと等しく必要不可欠である。さらに、ソフトパワーの活用は、世界平和の構築や異文化間の相互理解の促進にとって重要な役割を果たす。外交における市民参画の重要性の高まりは、青年層が外交において積極的な役割を果たせる時代が到来したことを示唆している。本コースは、参加青年が、青年外交を計画・実践できる機会の提供を目的とする。

2. コースの目的

参加青年は自国のソフトパワーを認識・考察し、実現可能な青年外交を考案することを目指す。他国の参加青年との交流から、各国がどのようにソフトパワーを活用しているか理解を深める。また、プレゼンテーションやディスカッションを通して他国の事例を学び、それぞれの国で青年層がどのように青年外交の役割を果たしているかを学ぶ。

3. セッション概要

セッション 1：ソフトパワー 101	
目的とねらい	活動の内容
■ 平和な国際関係の促進、民際外交における一般市民の役割の拡大、青年層がどのように一般市民同士の交渉・外交に積極的に関わっていけるかにおいてソフトパワーが重要な役割を持っていることを理解する	■ 各国のソフトパワーについて小グループで意見交換 ■ 現在の外交にかかわる人たちの傾向についてマッピング ■ クイズを用いて、他国のソフトパワーについて知る
セッション 2：青年外交の成功事例	
目的とねらい	活動の内容
■ 民際外交における成功事例の紹介と各国の現在の青年外交についてのプレゼンテーション	■ 各国の青年外交に関連するプログラムやイベントについてのプレゼンテーション ■ 発表したプログラムやイベントの有効性について小グループで評価する
セッション 3：青年外交プログラムのデザイン方法	
目的とねらい	活動の内容
■ 青年外交の企画についての実施訓練、青年外交を実行に移すことの障壁とどのように乗り越えるかについての意見交換	■ セッション 2 の理解度の共有 ■ 小グループでの青年外交プログラムの企画についての練習 ■ 意見交換の結果を各小グループから発表
セッション 4：多文化共生社会を目指して	
目的とねらい	活動の内容
■ アイディアや情報を拡散する側面からソーシャルメディアの重要性を理解し、青年外交のインパクトがソーシャルメディアを通して最大化する方法を学ぶ	■ 数名の参加青年からソーシャルメディアを使ったキャンペーンの成功事例を共有する ■ ソーシャルメディアを使った青年外交のプログラムやイベントを企画する練習を行う
セッション 5：サマリー・フォーラムへ向けてのまとめ	
目的とねらい	活動の内容
■ 国境を越えて影響を及ぼす社会問題を理解し、青年外交を通してこの問題の解決に向けた取組について考える	■ 青年外交を通じて解決できる社会問題について小グループで意見交換する ■ プログラム終了後に参加青年が実際に取り組める青年外交プログラムを企画する

4. ファシリテーターのコメント

コースは文化的外交とソフトパワーの概念の紹介から始まり、その後参加青年は 3 名以上の外国参加青年と 4 名以下の日本参加青年から成る小グループに分かれて自国のソフトパワーを紹介し合った。その意見交換は、参加青年たちにとって、開眼の機会となった。事前に知っていると思っていた外国に関する情報と、コース内で聞いた情報は大幅に違っていたようだ。同じ国の参加青年の間でも、自国のソフトパワーは必ずしも一致していなかった。

次にソフトパワーの例をいくつかのビデオで紹介した。その一つにイラク在住の日本大使の話があり、正式外交と青年外交の違いを強調していた。参加青年は複数のデリゲーションで構成される六つの小グループに分かれ、各々で興味のある地域または地球規模の問題（社会的、経済的、環境的などの観点から）を選び、その解決方法を考えた。特に、問題を解決する目的と、解決したとき誰が恩恵を受けるのかを明確にし、具体的かつ現実的な活動計画を作った。

寄港地活動が実施されたブリスベンの視察先は本コースの参加青年にとって良い刺激となったようだ。初日に訪問したクイーンズランド大学内のロータリーピースセンターでのパネルディスカッションでは 4 名のパネリストの体験談を聞き、多くの参加青年が自分のコミュニティに貢献しようという意欲につながった。三日目には、クイーンズランド大学で模擬国連会議を経験した。参加青年たちは三つのグループに分かれ、様々な国（先進国、新興国、発展途上国）を代表していると仮定し、環境変化について意見を交わした。翌日の振り返りセッションでは、国家間の外交の役割について討論し、青年外交との違いを改めて確認できた。

コースの最終セッションでは六つのグループが各 20 分のプレゼンテーションを行い、それぞれが取り上げた問題点、その具体的行動内容と期待される結果、活動計画、受益者、実施機関を発表した。発表後には他のグループの参加青年からフィードバックを受ける機会を設けた。チームセサミは「単なる挨拶以上に」という運動を始め、彼らが着目した若者間の有意義な会話不足という問題に対し、深い会話を行える機会を提供した。夕食時に各テーブルにトピックを設け、参加青年が中身のある会話ができる機会を作り、多くの青年が参加した。この船上での成功を基にし、今後も各々のコミュニティで同様の会話の機会を提供していく予定だ。チームスターシップは若者の失業に焦点を絞り、ワークショップを開催することによって、起業家精神を養う計画を立てた。参加青年から 4 名の起業家を招いて行った Peer-Learning セミナーには 60 名以上の青年が参加した。セミナーのねらいは、若手起業家からインスピレーションを得て、年齢を超えたネットワークを構築することだった。チームオッスは船内の食料廃棄量を減らすためのビデオとポスターを作成した。にっぽん丸での食事はビュッフェではあるものの、参加青年の食に対する意識改革と食習慣の改善を目標とした。チームアノニマスは教育を通して 10 歳から 12 歳の子供が持つ偏見をなくす活動を考えた。母校を訪れ、青年それぞれがこのプログラムを通じた学びについて共有する場を設ける予定だ。他の参加青年もオンラインで参加することを計画している。チームシータートルは大洋汚染に着目し、特にプラスチックの消費を減らす啓発活動を行った。事業期間中に使用したタンブラーの利用を続けることなどを参加青年に呼びかけた。また、事業終了後もソーシャルメディアで啓発活動を継続する計画がある。チームアブセントはソーシャルメディアで真実のニュースを流すシステムについて考えた。他の参加青年から、計画をより現実的かつ実践的なものになるようアドバイスを受け、どのようなポイントを重視するかなど考えた。

いくつかのグループは船上で活動を行い、青年外交をすでに経験できた。また、帰国後に活動を始めるチームも具体的な計画を作成しており、活躍が期待できる。

多様なバックグラウンドを持つからこそ、他者との協力方法などが異なった青年たちが一緒にプロジェクトを考えることは容易ではなかった。しかし、この経験を通じて他文化の人間とのかかわりを経験し、自分の持つソフトパワーを使って社会貢献に努める自信を持てた。何よりも、一つの事業を完了した達成感を味わってくれたと期待する。

サマリー・フォーラム

サマリー・フォーラムはコース・ディスカッションのまとめとして 2 月 26 日に開催された。それぞれのコース・ディスカッション・グループは工夫を凝らした発表を行い、コースを通しての学びを披露した。

参加青年は自分の所属するコース以外のコースの内容を詳しく知らないため、このフォーラムを通して他のコースが何をして、何を学んだのかを知る機会になった。また、他のコースの発表は、さらに広く多様なトピックに興味を持つきっかけとなった。

参加青年はフォーラムのためにコースのメンバーと準備や練習を重ねたことで、自身のコースの振り返りができた。サマリー・フォーラム当日はそれぞれがコース・ディスカッションのメンバーと過ごす最後の時間を楽しみ、他のコースについても知ることができ、すべての参加青年にとって心に残る経験となった。

All-PY セミナー

All-PY セミナーは、参加青年全体にとって有益かつ関心度の高いテーマを扱うセミナーとして、航海中、4 回開催された。いずれの回も All-PY セミナー委員会を中心に参加青年が企画・運営した。前半の 2 回はあらかじめ異文化理解、リーダーシップというテーマが定められていたが、後半の 2 回は委員会が協議を重ね、テーマを決定した。年齢や国籍、興味・関心が異なる 240 名全員が対象のセミナーであることを考慮し、毎回、同じテーマの中でも複数名のプレゼンターを選出し、多様な参加青年による多岐にわたるトピックのプレゼンテーションを聴くことができる機会を演出した。

＜ All-PY セミナー＞

日程	テーマ	プレゼンテーションタイトル	発表者
2/2（土）	異文化理解	個人主義と集団主義	オーストラリア参加青年
		抑圧的なコミュニケーションとは ～誤解を招かないために～	スウェーデン参加青年
		セクシャル・ハラスメント	エクアドル参加青年 ギリシャ参加青年 スウェーデン参加青年
2/6（水）	リーダーシップ	感情知性、自己管理とリーダーシップ	オーストラリア参加青年
		色から分析するリーダーシップ	日本参加青年
		パブリック・スピーキング	スウェーデン参加青年
		リーダーシップとマネジメント	UAE 参加青年
		リーダーの資質	トルコ参加青年
2/12（火）	環境と持続可能性	持続可能な開発目標（SDGs）	日本参加青年
		環境のためにいまできること	日本参加青年 チリ参加青年
		持続可能な世界	UAE 参加青年
2/19（火）	自己の再発見	心を満たすエクササイズ	日本参加青年
		痛みがなければ、成長はない	UAE 参加青年
		自分の殻を破って、自己実現する	日本参加青年

クラブ活動

クラブ活動に参加青年が主催者となり、各国の文化にまつわる自分の特技（ダンス、歌、伝統芸能など）を他の参加青年に教える活動である。参加青年は最大二つのクラブ活動に参加し、それぞれ 3 セッションを通して他国の文化を学んだ。主催した青年は、3 セッションの計画を立て、実行することで、プロジェクト・マネジメント力やプレゼンテーション力の向上につながった。

2 月 24 日に実施されたクラブの成果を発表するエキシビションでは、ほとんどのクラブがステージに上がり、3 セッションの成果を発表した。参加青年はそれぞれのクラブの発表を見ることで、各国の伝統芸能や言語について理解を深めた。

＜クラブ活動＞

主催国名	クラブ名	活動内容
日本	茶道 ～茶の湯を知る、 日本を知る～	喫茶はもちろんのことお花、建築、陶磁器、竹細工･木工芸品、造園、料理、禅等、多岐にわたる分野に関わる「茶の湯」を通して日本を発見することを目的とし、お茶を飲み楽しく、一期一会の場を全員で共有しながら茶の湯を学んだ。
	空手	直接相手と戦う「組手」と、対戦を想定した演武の「型」から構成されている沖縄発祥の武道である空手を、主に「型」を通して、空手の精神や、その基本的な動作の習得を目標とし練習を重ねた。エキシビションでは全員が型を披露できるまでになった。
	英語劇	日本昔話の桃太郎を英語で発表することを目標とし、オリジナルの脚本を作り、集まった個性豊かなキャストとともに練習を重ね、エキシビションでは小道具や衣装に頼らず、表現力で観客を楽しませた。
	柔道	日本の武道である柔道を初心者でも習得できるよう、柔道着の着方から学び、基本動作や礼儀作法を中心に練習を重ね、受身や投げ技ができるまでになった。エキシビションでは一連の流れを披露し、初心者から上級者までクラブ活動の成果を発表した。
	アカペラ	馴染みのある日本の歌を中心にピアノの演奏とともにアカペラで合唱をした。このクラブ活動を通して外国参加青年は、歌を覚えながら日本語の発音や歌の背景を楽しみ学ぶことができた。
	書道	楽しく書道に親しむことを目的とし、筆を使って書くことに慣れるため、自分の名前や絵を書くことから始め、作品作りも行った。活動の集大成には、エキシビションで書道パフォーマンスを行った。
オーストラリア	ディベート	３人を１グループとし２グループで構成され、30分間で意見を準備し、発表をした。オーストラリアの学校では、よく取り入れられている「ディベート」のスキルを身に付け、パブリックスピーキングに自信を持つことを目的とし、幅広い興味深い話題について考え、英語で意見を述べるスキルを身に付けることができた。
チリ	チリのスペイン語	チリの現代文化に触れながらスペイン語を学ぶことを目的とし、基礎を学んだ上で、チリと他のスペイン語圏のスペイン語の違いやチリの最近の流行語を学ぶことができた。
エクアドル	ラテンダンス	様々な音楽を通して、リズムに乗りながら楽しくラテンダンスを学ぶことを目的として、音楽に合わせてどのように体を動かすかということを習得した。初心者にもわかりやすいように細かく丁寧に教え、ラテンダンスを通してラテン文化を学ぶことができた。
ギリシャ	ギリシャ語	ギリシャ語を通して歴史や文化を学ぶことを目的とし、ギリシャのアルファベットや自分の名前の読み書きを学んだ。またギリシャのことわざや他言語の語源となる言葉についても触れ、ギリシャ哲学や歴史、神話について学ぶことができた。
ソロモン	テモツフィッシングダンス	ソロモン諸島の東に位置するテモツ州に伝わる伝統舞踊で海と大地と人との深い繋がりを表現している「フィッシングダンス」を学び、エキシビションでは伝統音楽と衣装でダンスを披露した。
	パンパイプ	ソロモン諸島で何千年も前から伝わる木管楽器であるパンパイプを通してソロモン文化に触れることを目的とし、エキシビションではパンパイプの演奏をダンスとともに披露した。
スウェーデン	ルチア祭	毎年 12 月 13 日にスウェーデンで行われるルチア祭について映像や音楽を通して学び、スウェーデンの文化に触れることを目的とした。エキシビションでは全員がルチア祭をイメージした衣装をまとい、ステップを踏みながら合唱をし、観客はルチア祭を味わうことができた。

主催国名	クラブ名	活動内容
タンザニア	キリマンジャロ	スワヒリ語の基礎を学び、挨拶や日常生活で使う簡単な質問ができることを目的とし、初心者でもわかりやすく習得できることを心がけた。またスワヒリ語の音楽も紹介し、歌の練習を行うことでスワヒリ文化を身近に感じることができた。
	セレブカダンス	タンザニアの伝統と現代の融合的なスタイルのセレブカダンスを習得することで、タンザニアの文化にいかに音楽とダンスが深く根付いているかということを学ぶことができた。
トルコ	トルコ語	トルコ語の語源をたどることで他言語との似ている部分を発見し、トルコ語を身近に感じながら楽しく学ぶことを目的とした。参加青年は日常生活で使うことができるフレーズを中心に習得した。
	トルコダンス	伝統的なトルコ音楽とともに舞踊の練習を通して、トルコに伝わる言い伝えを学び、トルコの文化に触れることができた。
UAE	ハピネスクラブ	国連が発表した世界の幸福度調査で 11 位にランクインした UAE デリゲーションが幸福度を高めるための船上活動として、瞑想やバースデーカード、ゲーム、アートなどを中心に行った。
バヌアツ	ビスラマ語	バヌアツで話されているビスラマ語を学ぶことで、バヌアツ文化に触れた。エキシビションでは、ビスラマ語を話す青年の様子をインタビュー形式で作成した動画を上映し、楽しくビスラマ語を習得した成果を発表した。

各国紹介セッション、ナショナル・プレゼンテーション

各国紹介セッション及びナショナル・プレゼンテーションは参加青年が国ごとに、自国の歴史、文化、伝統芸能、政治や経済等の社会一般について紹介することで、参加各国に対する理解と感謝の念を深めるとともに、自らの国の事柄について再認識することを目的として実施した。

各国紹介セッションは、プレゼンテーションを中心に構成され、自国をどのように紹介するか、練習や議論を重ねて、発表を作り上げる過程を通じて協働意識を共有し、より強い団結力を育んだ。ナショナル･プレゼンテーションでは伝統舞踊、音楽、写真や映像などを使って歴史や文化を紹介した。また、各国のお菓子や飲み物を試したり民族衣装を試着したりする場なども設け、各国の伝統文化をより身近に体験することができた。

Peer-Learning セミナー

Peer-Learning セミナーは参加青年主催で行われるセミナーである。公式プログラムである Peer-Learning セミナーとして開催されるためには、次の六つの条件のうち、四つ以上の項目に該当する活動であることが必要条件だった。1)「社会をより良くするための取組」に関した内容である、2) 各国に広げる価値のある活動である、3) 船上研修にいかせるスキルの共有や習得を目的とする活動である、4) 異文化理解を深め視野を広げる情報が含まれている、5) リーダーシップを身に付けられる内容である、6) 学術的な学びのある内容である。船上研修中に合計八つの時間枠を設け、1 回につき 5 から 10 のセミナーが開催された。

次の一覧は青年たちが実施した Peer-Learning セミナーの一部を抜粋したものである。

＜ Peer-Learning セミナー＞

主催者（国名）	セミナー名	内容
（オーストラリア）	オーストラリアの環境と野生動物	オーストラリア国内の多様な環境とそこに暮らす多種多様な動物について共有した。エコシステムや自然環境を脅かすものと将来的には野生動物が保護されるべきであることを説明した。
（オーストラリア）	国際ロータリーについて学ぼう	ブリスベンで訪れたロータリー・クラブについて、オーストラリア国内だけでなく、全世界において地域コミュニティに根差した活動を行っていることを紹介した。世界各国にクラブがあり、ユースに関するプログラムを運営しているため、参加することでどのように地域活性化に貢献できるかを話し合った。
（チリ）	V に飛ぶ	効果的なリーダーになるために必要な能力や起業家になるための過程を学んだ。
（ギリシャ）	Airbnb 文化について	近年の宿泊施設の選択肢について話し合った。宿泊施設の増加が観光地活性化につながることや宿泊施設にはその土地の文化を配慮しなければいけないことなどを意見交換した。
(日本)	自然災害と子どもの心～東日本大震災の経験から～	近年の日本で起こった自然災害についての紹介。自然災害が子どもの心に与える影響から子供のための哲学（philosophy for children）を紹介し、ワークショップを行った。
（日本）	異文化マネジメント	多文化が共存している団体において求められるリーダーシップとは何かを意見交換した。特に、リーダーとは何か、なぜリーダーシップが重要なのか、各自が抱えるリーダーやリーダーシップに関連する問題を共有し答えを導き出すという三つのポイントを中心に話し合った。
（日本） | あなたにとって平和とは | 第二次世界大戦を例に、平和について考えるセミナー。前半では広島への原爆投下を講義形式で紹介し、後半はそれぞれが考える平和の定義や平和な世界を築くために私たちができることについて小グループで話し合った。 |
（スウェーデン） | 非暴力コミュニケーションを通して自分を理解する | 非暴力コミュニケーションとは何か、どのような場面で活用するものか､自身の体験も交えて発表した。参加青年はペアになり、非暴力コミュニケーションを実演する機会が与えられた。この実演を通して学んだことや感じたことを共有する中でディスカッションを行った。 |
（スウェーデン） | 危機管理について | 危機管理、意思決定、クライシス・コミュニケーションについての紹介。危機的状況のときにどのように噂から真実の情報を守るかについて講義を行った。次に、参加青年はそれぞれチームに分かれ、司令塔や報道などの役割を担い、架空の危機管理のシナリオに挑んだ。 |
（タンザニア） | アフリカは国ではない | アフリカは国と認識している人もいるようだ。「あなたはアフリカ人ですか?」と言われたこともある。各々のアイデンティティを守るために世界にある誤解を明確にした。 |
（タンザニア） | ソーシャルメディア＆リーダーシップ | ソーシャルメディアについて学び、社会に多大な影響を与えられることを理解する。どのようにポジティブな影響を作り出せるかについても学ぶ。また、参加青年同士が自国のソーシャルメディアの事例紹介を行った。 |
（UAE） | ザイードの娘たち | アラブ首長国連邦建国の父、ザイード・ビン・スルターン・アル・ナヒヤーンの紹介をし、彼がどのように女性のサポートを行ったかについて簡単に説明した。最後にアラブ首長国連邦の活躍する女性たちを紹介した。 |
（バヌアツ） | ジェンダーの平等 | バヌアツのジェンダーの平等性について紹介し、参加国の状況について共有した。 |

スポーツ＆レクリエーション

スポーツ＆レクリエーションでは、イベント委員会が中心となり企画・運営を行い、レター・グループ対抗でトレジャーハントや綱引き、いす取りゲームなどを行った。参加青年の息抜きにもなり、また、競技を通してレター・グループ内の結束が強くなった。

自主活動

自主活動の時間や自由時間を利用して、参加青年の自発的なアイディアによる様々な活動が行われた。共通の興味や関心を持つ参加青年が一緒になり企画・運営しているものも多数あった。企画・運営のすべてが参加青年によって行われ、それらの活動を通して参加青年は相互理解と親交を深めた。

事後活動セッション

管理部員（PY サポーター）4 名を中心に、ファシリテーターやナショナル・リーダーと企画・運営を行い、参加青年の事後活動のビジョンを具体化することを目的として開催した。2 月 22 日のセッションでは事後活動の概要や関連組織の紹介に加え、既参加青年である管理部員やナショナル・リーダーが取り組む事後活動を紹介した。セッションの最後には環境、平和、教育、異文化理解、コミュニティ、保健、Keep SWYing（本事業の広報）から各自興味のあるトピックを選び小グループが決定した。

2 月 25 日のセッションでは、前回のセッションで選んだトピック毎に分かれ、該当トピックに関連した事後活動計画を模造紙に書き出した。作成した模造紙は全体に向けて掲示され、参加青年同士がお互いの事後活動計画を閲覧し、意見交換をした。お互いの作成した模造紙にシールを貼ることで、他の参加青年が企画した事後活動内容に賛同したり、応援したいという意思表示をし、企画者にとって活動を実行に移す原動力につながる機会となった。

講義：明治期から学ぶ先進的グローバルリーダー

2 名の日本参加青年が明治維新から 150 年を機に、明治期の日本の歩みを改めて振り返りつつ、参加青年の事後活動について考えるセミナーを実施した。セミナーでは、明治期に活躍した著名人の中で、特に渋沢栄一と津田梅子を例に挙げ、彼らが海外で得た知識や経験を日本に持ち帰り、日本を発展させた功績が現代の日本に大きく影響していることを紹介した。こうした彼らの功績を振り返りながら、自身を含め参加青年たちに対して、11 か国の次世代を担う青年が集うこの事業で得た学びを、今後の自国の発展や国際社会にどのように貢献するかという将来への展望について、それぞれの気づきを再確認する発表を実施した。

リエントリーセミナー

全参加青年対象に、心理カウンセラーの池田先生と既参加青年であるギリシャのナショナル・リーダーにより下船後に起こりうる身体的及び精神的な変化とその対処方法について説明があった。まず、池田先生よりプログラムが終了することで発生する、住む場所、会う人、話す言語などの環境の変化は精神的バランスを一時的に乱す可能性があるとの説明を受けた。しかし、今後もここで得た友情を継続させようという行動や、このプログラムで得た学びや成長を自国でもいかすなど、プログラムが終わったからこそできることがあるという前向きな捉え方もできることに気付くきっかけの一つとなった。ギリシャのナショナル・リーダーからはプログラム中に当たり前に使っていた「SWY」や「PY」などの言葉を使用せず、事業を全く知らない青年へどのように経験を語るかを二人ペアになって行った。

二つのセッションから青年たちは自国に戻った後に生じるギャップを乗り越え、プログラムの経験をいかしていくイメージが湧いた様子だった。

寄港地活動

寄港地活動のねらい

航海中、下記を目的に沖縄県、オーストラリアのダーウィン及びブリスベンで、寄港地活動を行った。

- 表敬訪問やレセプションなどの公式行事を通して、国際儀礼（プロトコル）を身に付ける。
- 各種施設を訪問し、その地域における文化や歴史、社会情勢について学びを深める。
- 大学における現地青年とのディスカッションを通じ、国際理解を深め、国際親善を図る。

沖縄県

平成 31 年 1 月 31 日、にっぽん丸は沖縄県那覇市に寄港した。沖縄県青年国際交流機構（以降、「沖縄県 IYEO」）のコーディネートのもと、沖縄の寄港地活動では七つの課題別視察先が用意された。沖縄訪問に先立ち、寄港地活動委員会が視察先の概要を参加青年に提示し、行き先の希望調査を行った。この調査結果をもとに参加青年をそれぞれの視察先に割り振り、次のとおり寄港地活動を実施した。

時間	場所	活動内容
8:00	那覇クルーズターミナル	入港
8:30	にっぽん丸・ドルフィンホール	沖縄県 IYEO によるオリエンテーション。沖縄県 IYEO 会長であり、「世界青年の船」事業の既参加青年でもある岸信朋氏による歓迎のスピーチ。
10:00	課題別視察先	七つのグループに分かれて課題別視察先に移動（昼食含む）
	沖縄科学技術大学院大学（OIST）	世界各国から教員と学生が集まり、科学技術分野の共同研究に取り組む沖縄科学技術大学院大学を訪問。学生による講義と学内ツアーを通して最先端の研究施設を見学した。
	那覇・南風原クリーンセンター／漫湖水鳥・湿地センター	ごみ処理やリサイクルに取り組む施設の視察後、渡り鳥の生態について学び、沖縄の豊かな自然の保護や天然資源の再利用について学ぶことができた。
	浦添市立森の子児童センター	児童センターに通う小学生や園児による歌や踊りを鑑賞した。児童館の職員による講演で、日本の教育システムについて学んだ。
	沖縄空手会館	空手発祥の地として、沖縄空手を国内外へ普及させる活動を視察した。また、空手の体験を通し、伝統空手の精神性を垣間見ることができた。
	繁多川公民館	伝統文化の継承や、海外とのビデオ通話を通じた国際交流に取り組むグローバル公民館の活動を視察した。伝統的な豆腐作りや三線の演奏などを体験した。
	斎場御嶽	世界文化遺産である斎場御嶽（琉球王国の聖地）で、ガイド付ツアーに参加。解説やクイズなどを通して琉球の歴史や、伝統文化について理解を深めた。
	沖縄県営平和祈念公園	資料館と平和祈念公園の見学、現地の青年とのディスカッションなどを通して、沖縄戦の歴史や平和資料館設立の経緯、平和教育の活動について学んだ。
15:00	那覇市内	自由時間
17:30	にっぽん丸・ドルフィンホール	参加青年帰船、出国手続き
22:00	那覇クルーズターミナル	ダーウィンに向けて出港

ダーウィン

平成 31 年 2 月 8 日、9 日、にっぽん丸はオーストラリアのダーウィンにて寄港活動を実施した。「世界青年の船」事業の既参加青年を含む約 40 名の現地ボランティアに迎えられ、コース・ディスカッションごとに異なる訪問先で学ぶ課題別視察や、地域住民との昼食交流会、高等教育機関でのパネル・ディスカッション、オーストラリアの既参加青年主催のレセプション・ディナーなど、学びと交流に満ちた二日間となった。

1 日目	場所	活動内容
8:00	ダーウィン港	入港
8:15	にっぽん丸・ドルフィンホール	入国手続き
10:30	にっぽん丸・ドルフィンホール	オーストラリア既参加青年及び現地ボランティアによる寄港地活動オリエンテーション。
12:00	ノーザン・テリトリー州議事堂	ノーザン・テリトリー州の観光・文化担当大臣による歓迎スピーチ、日本参加青年によるさんさ踊りの披露の後、地域住民と昼食を食べながら交流した。
14:00	チャールズ・ダーウィン大学	チャールズ・ダーウィン大学の教授による基調講演。その後、参加青年は自身の興味に応じて、「環境」と「人権」いずれかのテーマを選び、パネル・ディスカッションに参加した。
16:30	にっぽん丸船内	帰船、夜のレセプション・ディナーに備え着替え、来場者のための各国紹介ブースの準備をした。
18:30	にっぽん丸・ダイニング瑞穂	レセプション・ディナーの受付開始。参加青年は会場の入口付近に各国紹介ブースを設置。来場者はレセプション・ディナーの開始前に本事業の参加国の民芸品の展示やスイーツの試食を楽しんだ。
19:00	にっぽん丸・ダイニング瑞穂	オーストラリアの既参加青年主催のレセプション・ディナー。事業の趣旨に賛同した地元企業からは、ディナーの飲み物や食材が提供され、参加青年と来場者は地元の味を楽しみながら親睦を深めた。
2 日目	場所	活動内容
9:00	にっぽん丸・ドルフィンホール	ピース・セレモニー（平和式典）。今でこそ友好関係にある日本とオーストラリアだが、寄港したダーウィンは、かつて日本軍による爆撃を受けた歴史がある。戦後、両国の関係修復と友好促進に取り組んできた非営利団体、北部準州豪日協会により、船上平和式典が行われた。
11:00	課題別視察先	七つのグループに分かれて課題別視察先に移動
	Helping People Achieve (HPA)	障害者支援に取り組む HPA を訪問し、バリアフリー社会の実現に向けた課題や展望について理解を深めた。
	Provenance Arts	先住民族のアート作品を展示・販売する施設を訪問し、オーストラリアの先住民の歴史と文化を学んだ。
	Charles Darwin University AusTurtle Conservation	海洋生態系について研究するチャールズ・ダーウィン大学で、ウミガメの保護に取り組む施設を訪れた。
	Top End Aboriginal Bush Broadcasting Association (TEABBA)	先住民族の言語でニュースを発信する放送局を訪問し、少数民族の言語を継承する活動を視察した。
	Charles Darwin University Casuarina Campus	現地の大学生のリードのもと、リーダーシップの概念や発揮する方法についてディスカッションをした。
	Menzies School of Health Research	オーストラリア固有の病原菌に関する最新の研究から、病気予防と健康促進の取組について学んだ。
	Youth WorX NT	若者の職業訓練や就業支援を行う団体を訪問し、青年の自己実現を援助する地域社会の活動を視察した。
13:00	ダーウィン市街	自由時間
15:30	にっぽん丸・ドルフィンホール	参加青年帰船、出国手続き
18:00	ダーウィン港	ブリスベンに向けて出港

ブリスベン

平成 31 年 2 月 15 日～ 17 日、オーストラリアのブリスベンにて寄港地活動を実施した。ダーウィンに続き、既参加青年を中心とする約 50 名の現地ボランティアが三日間の活動を企画し、各訪問先での活動をリードした。課題別視察や地域住民との交流に加え、クイーンズランド総督ポール・デ・ジャージー閣下への表敬訪問や、在オーストラリア日本国総領事館の主催による船上レセプション・ディナーなど、参加青年が国際儀礼を実践する機会に恵まれた。

1 日目	場所	活動内容
11:00	ブリスベン港	入港
13:00	課題別視察先	七つのグループに分かれて課題別視察先に移動
	クイーンズランド総督邸	ナショナル・リーダーとアシスタント・ナショナル・リーダーはクイーンズランド総督ポール・デ・ジャージー閣下を表敬訪問した。総督邸ではティー・パーティに招待され、優雅な午後の一時を過ごした。
	Police Citizen's Youth Club (PCYC)	警察官とボランティアが、スポーツやレクリエーションの機会を提供し、青少年と地域社会をつなぐ特色のある活動を視察した。
	Headspace	12 ～ 25 歳の若者の相談窓口としてオーストラリア全土で活動する団体を訪問。青少年の精神保健分野の先進的な活動について学んだ。
	Albert Park Flexi-School	既存の学校では提供できない就学支援や学習環境を、柔軟に提供する中等教育施設を訪問し、あらゆる立場の生徒や保護者を支援する学校の取組を学んだ。
	Channel 7	テレビ報道局を訪れ、制作スタッフからメディアの潮流と地方局の役割について話を聞きながら、スタジオを視察した。
	ロータリー平和センター	世界に六校あるロータリー平和センター提携校の一つ、クイーンズランド大学を訪問し、平和構築と紛争解決を研究する学生から講義を受けた。
	Multicultural Development Australia	難民や外国人移住者の定住支援や地域への参画促進に取り組む団体を視察。ルーツの異なる人々が一つの社会で安心して暮らすための地域活動を視察した。
	International Education Services	大学内やオンラインでの授業を通じて、異文化理解を促進するプログラムを運営する教育機関を視察した。参加青年は講義の後、カリキュラムの一部を体験した。
15:30	にっぽん丸船内	参加青年帰船、レセプション・ディナーのための準備

19:30	にっぽん丸・ダイニング瑞穂	レセプション・ディナーを開催し、色とりどりの民族衣装を着た参加青年が、ブリスベンの寄港地活動に協力してくれた関係者らを歓迎した。クイーンズランド総督ポール・デ・ジャージー閣下や田中一成在ブリスベン日本国総領事からのスピーチに続き、参加青年は和太鼓やさんさ踊りを披露した。
2 日目	場所	活動内容
9:30	レッドクリフビーチ	ビーチで水難事故の予防や人命救助に取り組むSurf Lifesaving Australiaを訪問。参加青年は九つのグループに分かれ、Surf Lifesavingのボランティアの指示に従ってビーチフラッグやシーカヤックなどのアクティビティに参加した。
14:30	ブリスベン市街	フリータイム。自由行動を基本としつつ、オーストラリアの参加青年や既参加青年、現地ボランティアによるツアーも開催された。
21:30	にっぽん丸	帰船
3 日目	場所	活動内容
9:30	クイーンズランド大学	クイーンズランド大学を訪問し、オーストラリア既参加青年たちによるワークショップや講義に参加した。参加青年が世界の様々な国の代表者に扮してディスカッションをする模擬国連や、気候変動を分析して今後、地球に起こりえる変化を予測する講義などが行われた。
13:00	クリーブランド・ショウグラウンド	地元のロータリー・クラブのメンバーが企画するスポーツ大会。先住民族の伝統ダンスを鑑賞した後、参加青年はソーラン節とさんさ踊りを披露した。その後、四つのグループに分かれてチーム対抗の競技に参加した。
17:00	にっぽん丸・ドルフィンホール	参加青年帰船、出国手続き
19:00	ブリスベン港	ホニアラに向けて出港

帰国後研修

３月１日及び２日の二日間は日本参加青年に対し、ル・ポール麹町において帰国後研修を行った。研修では、ナショナル・リーダー、サブ・ナショナル・リーダー主導でプログラムの振り返り等を行ったほか、５月に開催される帰国報告会の実行委員を募った。また、本事業で得た知識や経験などをいかす事後活動のネットワークについて日本青年国際交流機構の代表者より説明された。

第３章

事業に対する評価